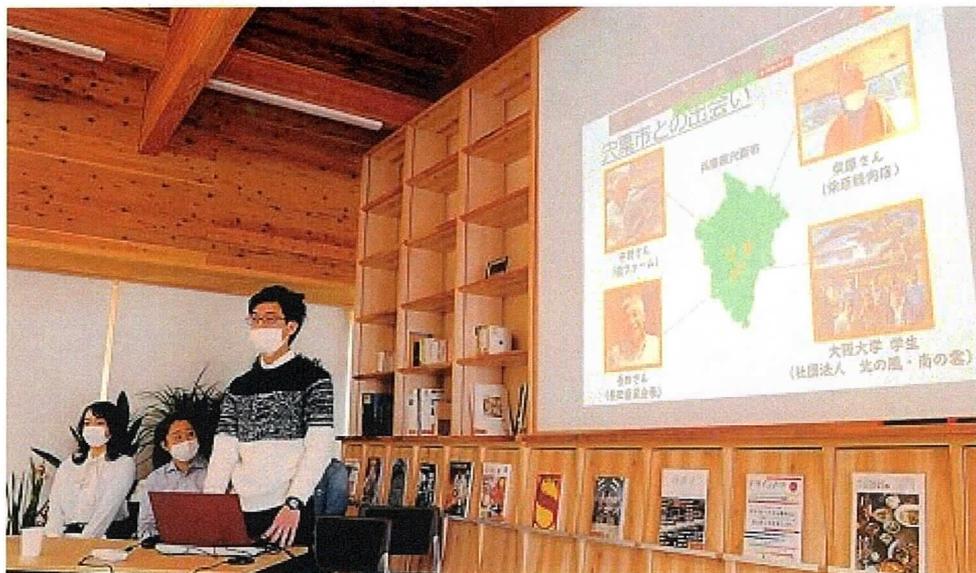


宍粟市での現地調査の結果を発表する大阪大学の学生たち
＝宍粟市山崎町御名、上林建設



阪大生5人、獣害など現地調査

宍粟の課題解決策を提案

地元在住の客員教授・思沁夫さん指導

大阪大学の学生5人が27日、宍粟市山崎町御名の上林建設で、地域振興策を発表した。宍粟市に住む、阪大客員教授の思沁夫さんの指導の下、学生たちは獣害など同市の課題を調べ、ジビエや地元農産品のPR策などを示した。

思さんは中国・内モンゴル出身で、文化人類学を専攻する。今回の発表は「海外フィールド・スタディ・プログラム」の一環。これまでは中国やモンゴル、ベトナムに渡り、現地の課題解決策を探る授業だったが、新型コロナウイルスの流行で海外渡航が難しくな

り、思さんが暮らす宍粟市での現地調査に切り替えた。

法学部、工学部、外国語学部の2～4年生は2020年12月に宍粟市を訪れて、イノシシの解体現場を見学し、薬草の一種ドクダミを栽培する人から話を聞いた。

この日の発表では、獣害被害の推移や、漢方薬市場の広がりをデータで示しながら、「獣害対策の補助金

マニュアルを作る」と地域住民が求める情報提供を提案したり、「ドクダミの粉末を用いたドーナツやコロッケなどの新メニューを生み出す」と試食の成果を発表したりした。

宍粟市で精肉店を営む柴原政司さん(56)は「地元猟師でも補助金について詳しくない人もいる。マニュアルは役立つと思う」と話した。

(伊藤大介)